

# 吉田城址 発掘調査現地説明会資料

令和6年11月2日(土) 主催：豊橋市文化財センター

時間 10:00～12:00、13:30～15:30

## 北多門北側石垣とは？

北多門は、本丸北側に築かれた多門櫓の下に埋門が設けられた構造で、門扉を挟み南側と北側の石垣の上を渡す形で多門櫓が建てられていました。北多門と入道櫓の間には塀がありました。石垣は6面から成り、東西約25m、南北7m、高さ2～8.5mになります。この石垣は孕みといった崩落の危険がありました。そのため、解体修理を行っています。これに伴いオリジナルの構造が失われるため、オリジナルの構造の記録と孕みの原因を探りました。



## ポイント1 豊川に面した石垣の当初の姿が明らかに！

調査区北側には、豊川に面した土の法面があります。法面下方に腰巻石垣、上方には北多門の多門櫓部分と塀が建つ鉢巻石垣があります。法面の西側から階段に面した石垣の栗石を検出しましたが、階段に面した石垣から3m東側のトレンチからも栗石を確認しました(①)。階段西側の武具所跡の石垣は腰曲輪から天端まで石垣で積まれているため、階段東側も当初は腰曲輪から天端まで高さ約15mの石垣が積まれていたと考えられます(②)。徳川家光が、正保元年(1644)に全国の大名に命じて幕府へ提出させた『正保城絵図』と関連が指摘されている『三州吉田城図』や、宝永地震(1707年)の被災状況を描いた『地震破損図』に石垣が描かれ、前二者と石垣の形は異なりますが、安政地震(1854年)の際の『地震之節破損所之覚』にも描かれています(③)。なお、安政地震の際には土塀・腰巻石垣に被害が出ており、鉢巻石垣の一部は江戸後期に出現する落し積みとなり(④)、さらに戦前の古写真では土の法面が写るため、安政地震以降に土の法面に変更されたと考えられます。なお、現在みられる当初の石垣の栗石層は、瓦の特徴から江戸時代中期以降のものと考えられます。

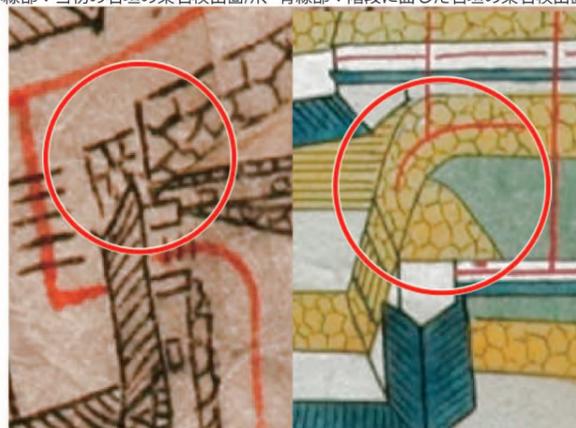


① 豊川に面した法面

(赤線部：当初の石垣の栗石検出箇所、青線部：階段に面した石垣の栗石検出箇所)



② 当初の石垣のイメージ



③ 絵図に見る石垣(○の部分)  
(左：三州吉田城図、右：地震之節破損所之覚)

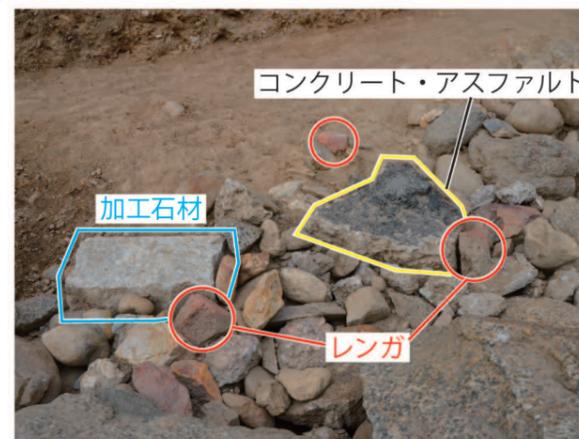


④ 鉢巻石垣の落し積み状石材(矢印)(背面から)

## ポイント2 孕みの原因が明らかに！

調査した石垣の南面と西面に、大きな孕みが見られていました。南面を解体すると、孕みよりも西側の栗石層からコンクリート片やアスファルト、レンガや四角に加工された石材が出土しました(①)。このことから、記録にない戦後の積み直しがあることがわかりました。南面東側の宝永地震(1707年)の積み直し部分と、コンクリート片などが栗石に混じる西側の間にV字状の目地が通り(③の矢印に沿った赤線)、その頂点の石材が割れ、割れた石材直上の石材がズレ動き、約30cmも石材が突出し孕みました(②・③)。V字状目地の上方に生育していた松の加重があったこと、さらに石垣前面の排水管設置が原因と考えられます。

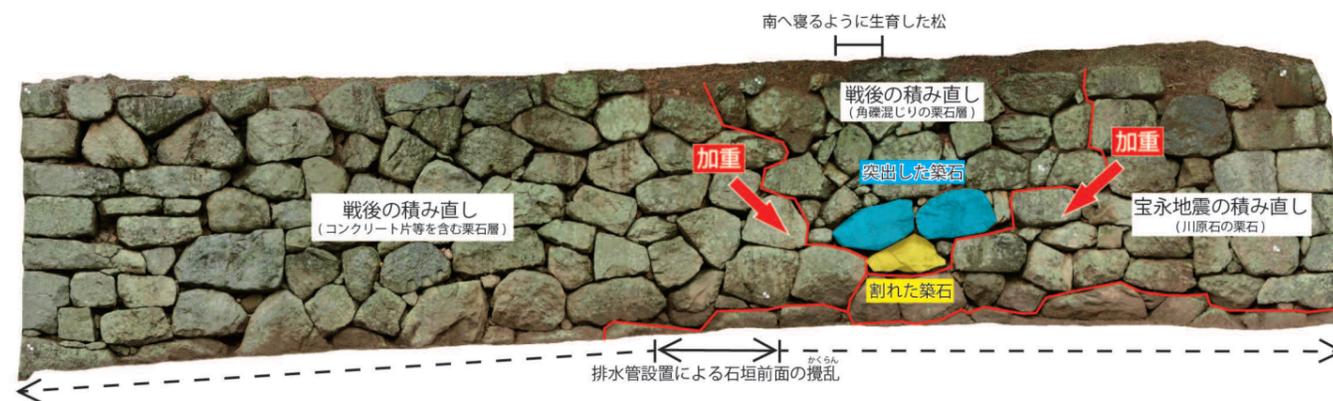
西面は安政地震(1854年)で崩落したことが絵図に記録されており、江戸後期に積み直されたことがわかります。多門櫓が建てられた鉢巻石垣の角にある算木積みの下方の石材の控えとなる長さが26cmと、今回の調査石垣の控えの平均値である56cmの約半分のみでした(④)。さらに、孕みの裏側に根が生えたことによる栗石の機能低下、昭和40年頃には存在した照明の基礎設置による栗石の状態変化や加重が起因となったと考えられます(⑤)。



① 栗石層内の近現代遺物



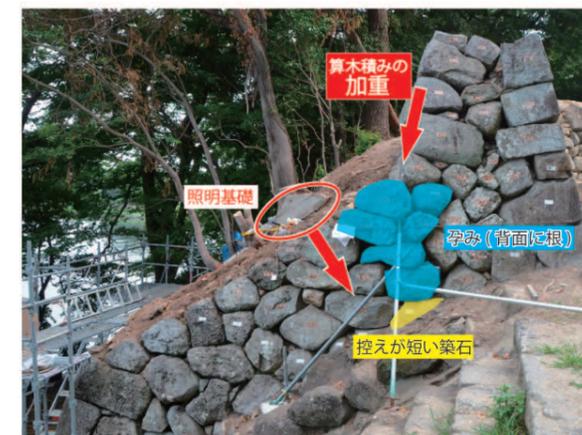
② 南面の孕み



③ 南面の積み直しと孕みの原因



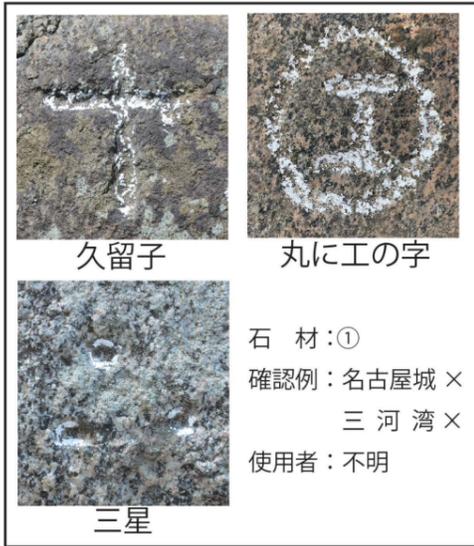
④ 西面の控えが短い築石



⑤ 西面の孕みの原因

### ポイント3 新たに刻印を確認しました

解体対象の316石のうち、刻印が見られる石材が9石、計12点ありました。そのうち7点は、今回の発掘調査で初めて確認しました。吉田城の石垣は名古屋城の「残念石」を使用したと伝わりますが、名古屋城でも見られる刻印が8点、そのうち2点は名古屋城の石材を切り出した石切り場の一つである西尾市前島でも見ることができます。石材②には海洋生物であるゴカイの巣が付着しているため、名古屋城のために三河湾沿岸で切り出された石材が海辺に放置され、吉田城で石垣を築く際に搬入したと考えられます。しかし、名古屋城や三河湾でも確認されていない刻印石もあり、全てが残念石ではない可能性があります。現在、本丸内部で見られる石垣の多くの箇所は、元和8年(1622)頃の松平忠利の本丸整備で初めて築かれたと考えられており、刻印が刻まれた石材はその際に搬入されたものでしょう。



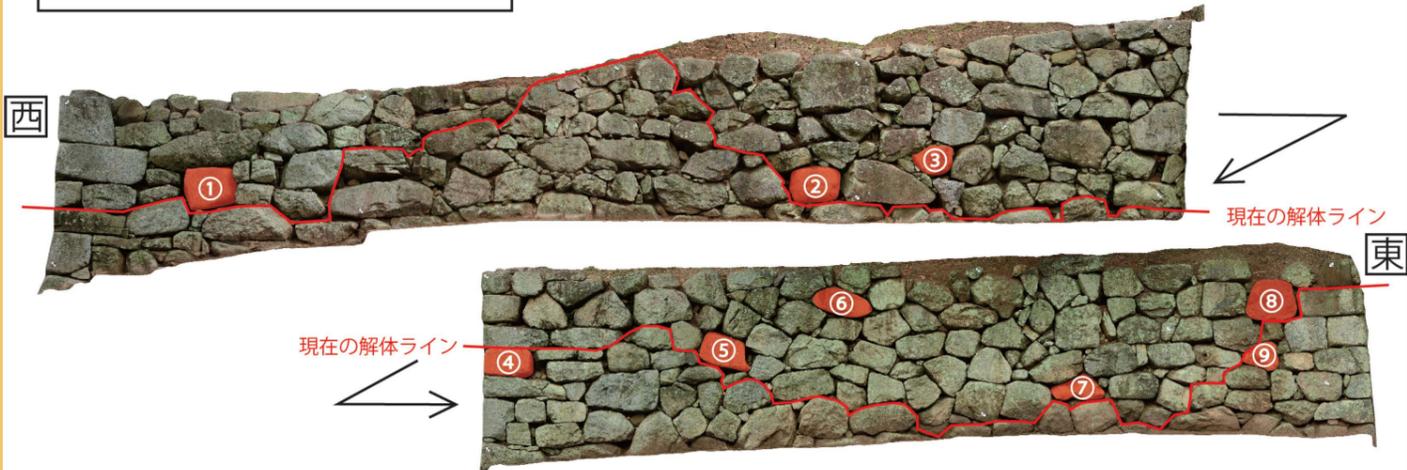
石 材:①  
確認例:名古屋城×  
三河湾×  
使用者:不明



石 材:②  
確認例:名古屋城○  
三河湾×  
使用者:加藤清正など



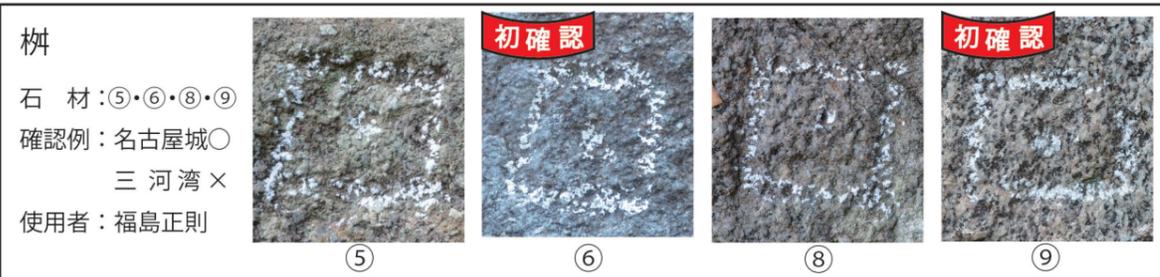
石 材:③  
確認例:名古屋城○  
三河湾○  
使用者:福島正則  
備考:ゴカイの巣が付着



石 材:④  
確認例:名古屋城○  
三河湾○  
使用者:福島正則



石 材:⑦  
確認例:名古屋城×  
三河湾×  
使用者:不明  
備考:孕み原因の割れた石材

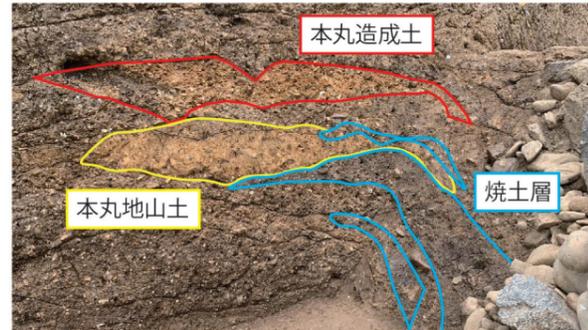


石 材:⑤・⑥・⑧・⑨  
確認例:名古屋城○  
三河湾×  
使用者:福島正則

### ポイント4 石垣内部の構造が明らかに！

石垣の内部には栗石(裏込石)が敷かれ、さらに内側となる土塁があります。土塁は瓦が見られるため江戸時代に築かれたと考えられ、とても丁寧に版築をしています。一部の土は、過去の本丸調査でも確認された本丸造成土・焼土層・当時の地表面である地山の土を確認することができ、土塁を築く際に本丸の土も利用したことが分かります(①)。特に、焼土層は酒井忠次期～池田照政が鉄櫓の石垣を築く前(1565～90頃)の時期に形成されたため、この土塁が照政期以降に築かれたことが分かります。さらに、土塁の下から高さ1m以上の高まりが確認され、酒井忠次期以前の土塁の可能性もあります(②)。

解体石垣西端の、江戸時代には北多門の多門櫓部分が建てられていた石垣を解体すると、内部には土塁がなく、粘性土を多含んだ栗石層のみでした(③)。栗石層は円滑な排水と土塁から築石へかかる土圧の軽減機能を持ちますが、粘性土が25%以上含まれると粘性土の性質に変化します。石垣上方は固く突き固められており、栗石層への土砂の流れ込みは考えにくいですが、そのため、栗石層だけでは石垣を保てないと当時の人が考え、粘性土をわざと含ませて築いた可能性があります。



① 土塁中に見られる本丸の土



② 土塁下で検出した土塁状遺構と焼土層



③ 解体石垣西端内部の状況

### ポイント5 多様な遺物が出土

栗石層から、ポイント②で紹介したコンクリート片やレンガの他に、瓦が多く出土しました。池田照政期と推定される無文瓦が出土しました(①)。これは製作技法や型の特徴から桐文瓦を製作した過程で、範木を押さなかったものと考えられます。また、水野忠清期(1632～42)の沢瀉紋軒丸瓦も出土しました(②)。その他、池田照政期の小菊瓦なども出土しています。



① 桐文瓦(左)と無文(推定桐紋)瓦(右)



② 沢瀉紋軒丸瓦(右:南多門出土/左:北多門出土)